『文化会議』平成2年7月号 第253号

素論が紹介され、その四元素論に基づく人間の性質の説明に次の言葉が記されている。「冷たくて湿っている体液が粘汁 Flegme で水の性質を持つ。なかなか反応を表さず沈着、悪く言えば煮え切らず、鈍重である。動作が遅く活気が無いだけでなく、寒がりで眠り込み易く過去の事を忘れる。老人に多い性質である。」お互い年をとってしまった同士の慰めか。

（平凡社・二、五七五円）

花から花へ……

ドナルド・キーン著／金関寿夫訳『日本人の美意識』

稲賀繁美（三重大学助教授）

その処女出版からまもなく半世紀に及び、今なお膨大な『日本文学史』を執筆中の、著者の巨大な業績のなかから、本書に取られたのは、四十歳代の比較的学術的な体裁をもったエッセイ七本であり、そこに恩師アーサー・ウェイレーへの追悼と、一九六六年現在の「専門家の告白」が添えられている。

『日本人の美意識』は、冒頭に総論として据えられたエッセイの題名に由来する。この文に限らず、本書に取られたエッセイはいずれも本来、日本人を読者として想定したものではない。だがそれだけに、事情に通じぬ欧米の教養人に、一体なぜ日本人は、「ただ数日の開花を楽しむために、果樹のくせに実を結ばず、代わりにいやらしい毛虫を沢山寄せ付ける樹に首ったけ」になったりするのかを納得して貰うためには、こんなに重宝な「あんちょこ」は他にない。この総論は、今や、それ自体暗唱に値する古典である。

その見本として、キーン教授おはこの一つだが、やはり芭蕉の「枯枝に烏のとまりけり秋の暮」読解を挙げておこう。はたして烏は単数か複数か、「秋の暮」とは秋の「日暮れ」のことなのか、それとも晩秋のことなのか。英語という異語に翻訳してみてはじめて明らかになる、こうした多義性ないし曖昧さにこそ、確定を拒絶して摺り抜けてゆく意味のたゆたいがあり、そうした余情が日本詩歌の魅力となっている。

そのように説く著者は、しかしそうと知ったからには、今や不可能でしかない選択を下して、裏切られること必定の英文訳を新たに織り上げるの他はない。「定めなきこそ、いみじけれ」。およそ何であれ、断定は、その端から掘り崩されるのが、日本と付き合った身の定めなのだ。そして、「わざとせぬがよき」という美学を、それでも英語で「して」みせ、「見ぬ日ぞおもしろき」という美意識を、それでも見せねばならないのだから、事はやっかいなのである。

聡明さゆえの屈曲。おそらく、さればこそ、ウェイレーにたいするキーン氏の評価は、微妙な翳りを宿さずにはおかないのだろう。とかくその意訳があまりに自由であると物議をかもすウェイレー訳ではあるが、『源氏物語』にせよ『枕草子』にせよ、その原文の雰囲気にもっともしっくりとなじむトーンで唱和してみせるかれの「天才的な直観力」と、それを支える知識には実は恐るべきものがあった、という。注釈書もないのに、漢文を含めどんな難解な文章でもほとんど本能的に理解できたというのだから、恐るべきはなしである。

晩年手の不自由なウェイレーに、筆耕となることを申し出たほどのキーン氏である。この恩人の声を聞きたければ、遺された本の一冊をひもときさえすればよいのだ、という慰めには、かえって取り返しのつかぬ喪失感が痛切に滲んでいる。キーン節のこうした翳りは、なにかしらぶれた重ね絵のような、捉え

［書評］「花から花へ」（ドナルド・キーン著、金関寿夫訳、『日本人の美意識』）『文化会議』1990年 7月1日 253号 pp.42-44.

がたい立体感と奥行きとをこの文章に与えていて、そのあたりに、手だれの訳者、金関寿夫氏をも悩ませた、イギリス仕込みらしい渋いユーモアの淵源を認めることも可能だろう。だが、それこそウェイレーの「無限のかげりと微妙な響き」を愛してやまぬキーン氏の私淑の証しと解せられ、この追憶をひときわ味わい深い作品に仕上げている。

† †

このように、大理石の彫像などとは違って、どこか明確な像を結び得ぬままに移ろっていってしまうのが生身の人間というものなのだろう。そのかそけきさまを、「人間を真に人間たらしめている、あの矛盾や曖昧さ」もろともに描いてしまうところが、実は著者の不思議な才能であって、彫刻家ロダンのモデルとなった女優を扱った「花子」などもその好例であろう。ここでキーン氏は触れておられないが、そもそもロダンの花子評には fort belle aussi dans sa puissance singulière（彼女の特異な力強さにおいても大変美しい）とあったが、鷗外は短編「花子」の中で、それを「強さの美ですね」と意訳して、大和撫子の芯の強さを強調した。こうして花子にいわば西欧的な個我を宿らせるのに成功した鷗外は、それをロダンの言葉に巧みに引き寄せる。人体とは霊の鏡、形の上に透き徹って見える内なる焔なのである、というそのロダンの認識そのものは、西欧古典主義が世紀末象徴主義を潜ってたどり着いた認識であろうが、かくしてロダンは日本女性の美徳を、花子の裸体を透かして見抜いたことにもなったわけだ。（平川祐弘著『和魂洋才の系譜』参照）

キーン氏もまた鷗外と同じように、花子に「日本人の内なる焔」を見定めようとしたのに違いない。実際、この文章は「花子という女性は、きっと偉大な女性だったのに違いない」と結ばれているのだが、いささか意地悪な見方をすれば、この結語、少々無理に取ってつけた様で、かえって著者の論述を裏切っているかのごとくにも見える。

ところがウェイレー追悼の結語の場合と同様、この一見冗語ともとられかねない紋切り型のお陰で、元より「偉大」といった形容にはなじまない花子の姿は、かえって何かしら神秘的で、把握しがたいものへと不意に変貌してしまう。個たる日本人の姿を求めることは、例えば一休のごとき破格の破戒僧相手にこそ成功を収めたものの、畢竟花子の場合、そうした意図が期待倒れに終わるのを、どうやらキーン氏は悟っていて、敢えて場違いな形容詞を挿入したものらしい。いわば著者として、わざと「負けて」みせることで、読者の想像力に「勝ち」を譲り、かくして言葉にならぬ主張を伝達しようというのである。

† †

捕えようとしても、するりと逃げてしまい、無理に捕まえればその美も失われる。だがそんな心もとないあやうさは、その実、いざとなれば軽やかに身を翻して我々を出し抜くしたたかさをも秘めていて、それをこそ日本の女性美なのだとキーン氏は言いたいのだろう。そして言挙げを拒むこのあやうさをそれと（なく）示すには、敢えて反語を弄するしか手段がなかったわけだ。

とすれば、臆せずして、その矛盾を体現してみせるところに、ドナルド・キーンの「偉大」も在ろう。本書の醍醐味は、そうした花子のたたずまいを裏から支えていた日本の文化を縦横に記述し、詳細に解析するキーン氏の手の内を拝見するにある。総論に続く、平安文学感性史は、女性の才能の開花が日本の古典的規範へと生成し変貌する様を説くし、日清戦争の文化史を説く長編は、国際女優花子誕生の背景とも読めよう。日本の十六世紀ルネサンス文学における個性と型の相克を論じた章には、密通のかどで処刑されるにおよび、「優しい微笑」でもって彼女の運命を受け入れる『好色五人女』のおさんの amor fati（運命への愛）が語られるが、そこに、生まれて初めて裸体のモデルとなり、その「死刑を宣告された人間の顔」がロダンを感動させた花子にも通底する「死に直面した日本人が示すあの意志の力」（ロダン秘書クラデル嬢の回想）を読み取るのも一興であろう。

なかんずく白眉は、近世演劇論。型の虚構が現実以上の「女」を練り上げた歌舞伎と、

舞台が実際の心中事件を誘発しかねぬという本末転倒に至った浄瑠璃とは、生身の身体と木偶人形という、まさに虚実の間を縫って競い合い、絡まりあって、その皮膜の間に藝の境地を高めていく。筋の現実感は様式の非写実性ゆえに初めて保証されたとする卓説は、『曽根崎心中』以来人形遣いを観客に見せるようになった歴史的経過を説得的に説明するばかりか、「人形と人形の主人でもあり奴隷でもある人形遣い」とのふたつの世界を往還して、常なる異化作用に身を委ねる鑑賞の陶酔感までいかんなく伝えてくれる。日本の美意識が西欧の表象（ルプレザンタシオン）の美学では割り切れぬことを自ら演じて（ルプレザンテ）憚らぬゆえの名人藝だが、その読書の愉しみは、これはもう秘すれば花、読者各位に譲るほかない。

（註）矢代幸雄を八代、フリードレンダーをフリードランダー等の誤記が目についたが、困難な翻訳のほんの瑕疵にすぎない。ただヴェラスケスの次行にヌーボー・ロマンと書かざるを得ぬこの国の文教政策を憂えるばかりである。一貫性にも欠け、原音主義にも背馳するからと、編集部の求めに応じて蛇足ながら申し添える。

（中央公論社・一、三五〇円）

◎インティファーダを分析する

池田明史編

『中東和平と西岸・ガザ

——占領地問題の行方』

◎丸山直起（国際大学教授）

一九八七年末に開始するイスラエル占領地のヨルダン川西岸・ガザ地区アラブ住民の蜂起は依然として衰えるところを知らない。アラビア語のインティファーダ（住民蜂起）もすっかり定着した感がある。本書は、このインティファーダを多角的に分析した六編の論文を収録した研究書であり、それぞれが各専門分野の研究者の執筆によるものだけに、いずれも十分な説得力をもっている。

中東和平にしても、パレスチナ問題にしても、イスラエルが最大のカギを握っていることは誰の目にも明らかであろう。ところが、日本の中東研究のなかでイスラエルが真面目に取り上げられることは極めて少なかった。インティファーダにしても、その広範な影響力を考慮すると、もっと正確に把握され、分析されねばならないのであるが、実際には多くの場合、「諸悪の根源はイスラエルで、正義はパレスチナ人にある」式の議論が罷り通ることになる。

本書に収録されている論文は、「寛容な占領」神話の蹉跌（池田明史）、パレスチナ占領地問題と米ソの対応（木村修三）、イスラエルの東部国境設定について（辻田真理子）、西岸・ガザとPLO、ヨルダン（立山良司）、イスラミック・ファクター（高橋和夫）、ユダヤ系アメリカ人とパレスチナ問題（河野徹）である。

† †

池田によれば、インティファーダは、寛容なポリシイに隠されたイスラエル側の占領地の現状の維持にかける甘い期待をことごとく粉砕してしまっただけでなく、その後にはもっと深刻な事態が待ち受けているという。つまり、かつて六七年の六日戦争直後にアラブ側がいわゆる三つのノーを表明することによって柔軟に対応する術を失ったのと同様、イスラエルもまたPLOとの対話を拒むことによって事態に対応しうる機会を失してしまい、いずれは否応なしにより厳しい状況に直面せざるをえなくなろうと見ている。あるいはもはや手遅れになっているのかも知れない。しかも、イスラエルの拠って立つ民主主義の基盤がどんどん崩落しつつある。木村は六七年以降における米ソ両国の占領地・パレ

編集後記

▼関税自主権の喪失と治外法権。孫文は、安政の不平等条約が結ばれていた一八五八年から一八九四年（明治二十七年）までの三十六年間の日本は「欧米の植民地であって独立国ではなかった」と言ったそうです（司馬遼太郎著『この国のかたち』一）。しかも、この条約は日本が欧米との総力戦に敗れて締結したものではなく、強引に世界史の舞台に引き摺り出され、砲口に囲まれた中で判をついた条約でした。正しく日本の近代化は故鈴木成高氏が看破したように、「日本が西洋をとりいれたというよりも、世界が日本をみずからのうちに引き入れた」ことによって起きた出来事（『世界史における現代』）でした。ただ、その西洋の真似をして〝膨張〟し過ぎたことの是非は、充分議論されなければなりません。

▼坂本多加雄氏の論攷は、西欧列強のアジア侵略という緊迫した状況の下で、日本の「独立」を堅持せんと、「三寸の舌、一本の筆」で政論を説き続けた福沢諭吉の内面を精緻に分析した力作です。当時の外圧は、NOと言うべきか否かで議論している今日の比ではありませんでした。翻って百年後の日本は、福沢が望んだ以上の、そして西欧以上の「有形の文明」を獲得しましたが、逆に「文明の精神」を見失い、ジャパン・バッシングを叩き返すという「偏頗心」さえ広がりつつあります。晩年、福沢は『自伝』の中で、今後は「全国男女の気品を次第々々に高尚に導いて真実文明の名に恥ずかしくないように」したいと述べていましたが、今日の日本人は彼が理想としたものから寧ろ遠ざかりつつあるように思います。

▼西洋史と東洋史との〝暴力的な結婚〟を排して、整合性のある「世界史」を描く――。中央ユーラシアの民族移動に着目して、この壮大なテーマに挑んだのが岡田英弘氏の講演です。今でこそ中央ユーラシアは二大共産主義国によって、その大部分を占められていますが、かつては草原の遊牧民が歴史の主人公であり、西に東に駆け抜ける彼らのエネルギーは周辺諸国の運命に大きな影響を与えてきました。問題は二十世紀末の少数民族の運命です。革命の旗の下に吸収・統合された諸民族が、いま各地で、その統合原理から離脱しようとしています。一体、革命は大ロシア族や漢民族が少数民族を支配するための方便に過ぎず、共和国や自治区という統治形態も、内実は彼らの植民地だったのか……。

▼社会主義とは何か。それは、昭和の日本及び日本人にどのような影響を与えたのでしょうか。昨年九月、日本文化会議では「昭和史の検証――内と外からの視点」と題してシンポジウム（年次集会）を開催しましたが、本年の年次集会はその第Ⅱ部として、「昭和と社会主義」を統一テーマに掲げました（九月二十三日開催）。個人会員・会友の皆様には追って御案内状をお届け致しますが、基調報告者の顔ぶれについては本誌三十七頁を御覧下さい。御光来をお待ちしています。（安田）

本誌は新宿・紀伊國屋書店で取扱っております

文化会議　平成二年七月号（通巻第二五三号）

平成二年七月一日発行
定価四〇〇円（送料五一円）

編集兼発行人　鈴木重信（日本文化会議専務理事）

発行所　財団法人日本文化会議
東京都千代田区紀尾井町三―二三
文藝春秋ビル（〒一〇二）
電話　〇三（二六一）二七五一

印刷所　富士美術印刷株式会社
東京都荒川区西日暮里一―六二―八
電話　〇三（八〇三）一一七一

『文化会議』購読の御案内

㈶日本文化会議は、昭和四十三年六月、広く我が国の自由の立場に立つ知識人を結集し、文化に関する各分野の有機的な連携をはかり、世論喚起の活動を通じ、日本文化の健全な発展に寄与することを目的として設立されました。爾来、その目的を達成するために、正しい世論形成に向けての活動等を行っております。御友人、御同僚の皆様に当誌の定期購読をお勧め頂ければ幸甚でございます。振込用紙を用意致しておりますので、右発行所「雑誌係」までお気軽にお電話下さい。

□月刊『文化会議』購読御希望の方は、住所・氏名、第何号からと御明記の上、右発行所宛お申し込み下さい。

□振替口座　東京九―七〇九六二

□年間購読料　五〇〇〇円（送料共）

本誌掲載記事の無断転載を禁じます